

昔、お世話になった校長先生に、よくこんなことを聞かれた。「お前は、いくつになったんだ」これが年に一度や二度ならばわかる。それが年に10回も同じことを聞かれると、さすがにいろいろと考える。「人の話を聞いていないのか」「一年に何歳も歳を取るわけがないでしょ」

私も、あの当時の校長先生と同じくらいの年齢となった。では、自分はどうなのか。悲しいかな同じような現象が起きている。自分としては、まじめに人の話を聞いているつもりなのだが、入ってこないのである。

若い頃は、覚えなくてもいいことまで頭に入っていた。人の年齢も、一度でインプットされていた。それが、今ではどうであろう。その人の年齢や出身地、以前の勤務校などの情報が、情報として定着しない。記憶力が落ちたのだろうか。それは認める。単純な電話番号などの数字を覚えられない。短期記憶が弱くなっている。

だからといって、すべてのことが覚えられないというわけではない。仕事に関することは意外と覚えているのである。自己分析の結果が出た。記憶できる量は、落ちた。その分、必要なものだけを覚えるようになったということだろう。仕事のことまで記憶できなくなったら困る。電話番号は、いちいち見ながら確かめながらでよい。その方が、かえって間違いもなくなる。FAX番号など、覚えようとしなくてよい方がよい。何度も確かめながらの方が断然よい。

こういう分析もある。人の話を覚えていないのは、その人への興味の問題もあるのではないか。興味があることであれば、覚えているだろう。人への興味が薄らいでいるとしたら、あまりいい傾向ではない。

昔から知っている、ある人は、もう何度、私に年齢を聞かれたかわからない。「いくつだっけ」私の方は、聞くたびに一つ年齢を加算している。「なかなか歳を取らないなあ」「いつまでも若いなあ」当たり前である。一年に2つも3つも歳を取るはずがない。

私の母親は、もう90歳を超えている。だが、記憶力は全く衰えない。誰々の何々さんは、今、何々をしている。何々さんの息子さんは、娘さんはといった具合に、その家の家系図が頭に入っているかのように話す。

若い頃は、自分も、この人の息子であり、DNAを引き継いでいると思ったものである。しかし、違った。私は、ただの人だったようである。

お世話になった校長先生には、私の出身地もよく聞かれた。毎回、同じ答えを繰り返した。当たり前である。出身地は一つである。変わるはずがない。今思うと、年齢と出身地を聞くことは、ルーティンのようなものだったのかもしれない。

この前、うちの職員に何かを聞いたときに言われた。「この前、校長先生には話しました」これは、いけない。信用問題である。気をつけなければ。「いくつだっけ」これは、私のNGワードとしたい。